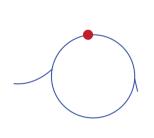
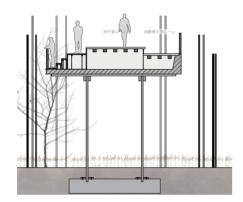
タ打造し~ 自動祭り関レーン

1). 17 とり につかいい



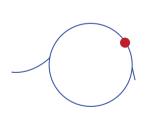








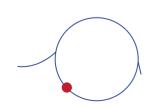


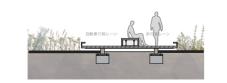






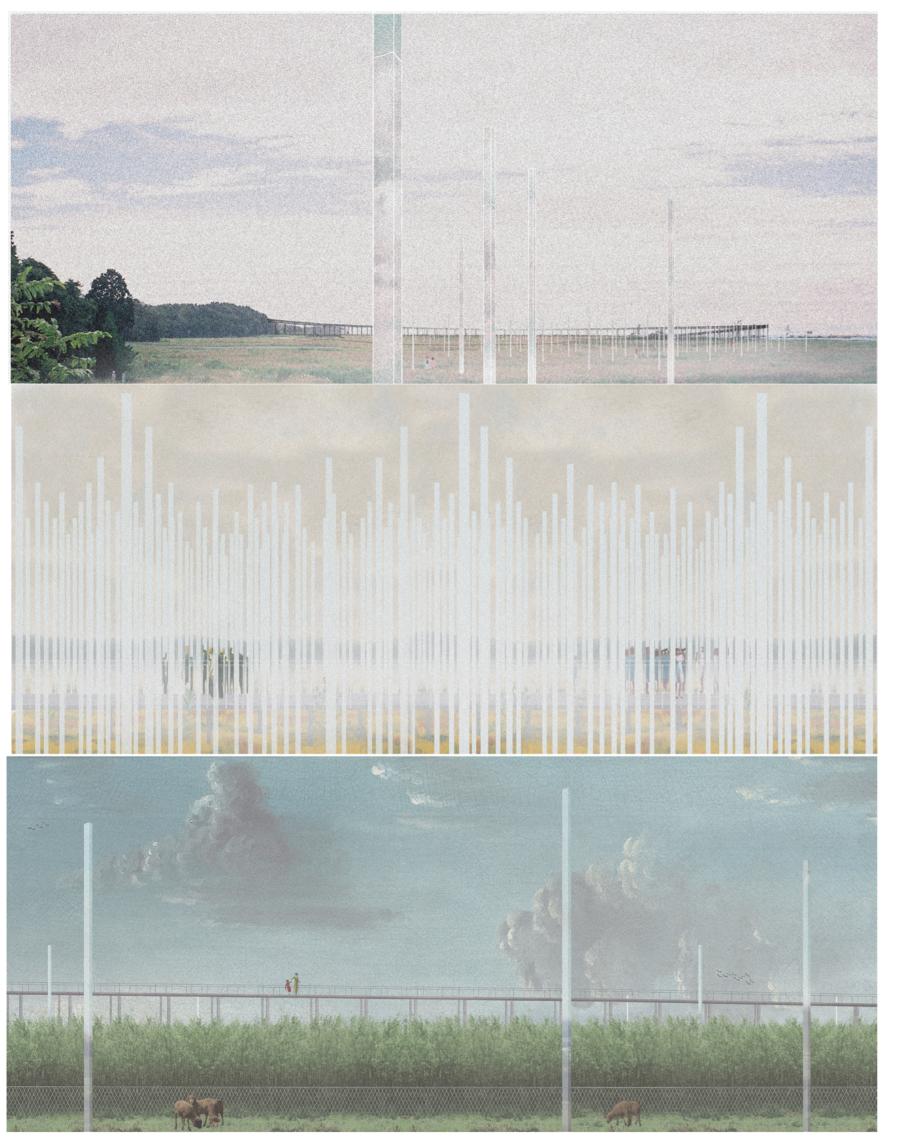


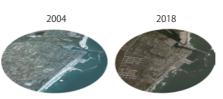




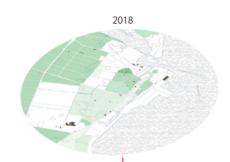


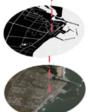






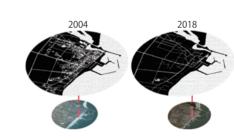
フィールドワークを行なった請戸地区は、海側から漁港があり、すぐ近接して住宅が広がり、 その後ろに田畑があり、その奥に山が連なっており、職住近接の暮らしが営まれていた。





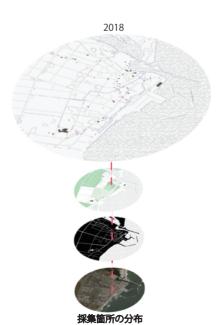
緑地の分布

現在は、かつて住宅街が広がっていた部分・農地であった部分のほとんど全てを雑草が覆い尽くしている。



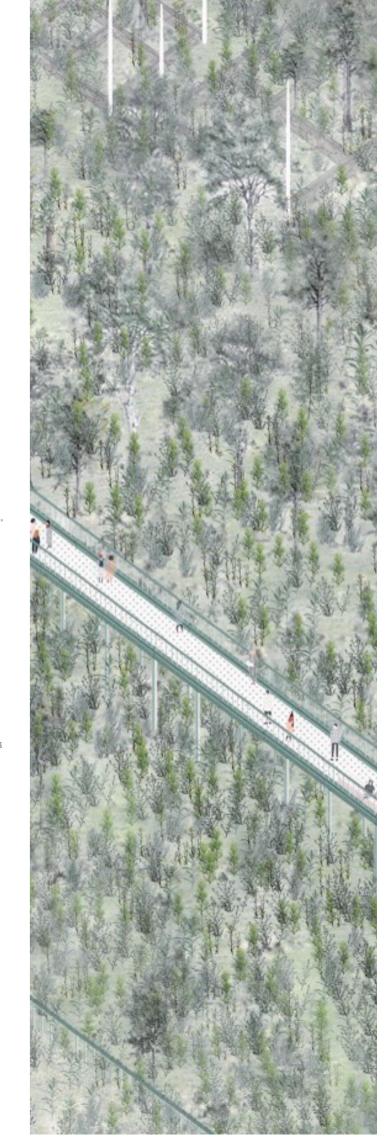
津波の被害

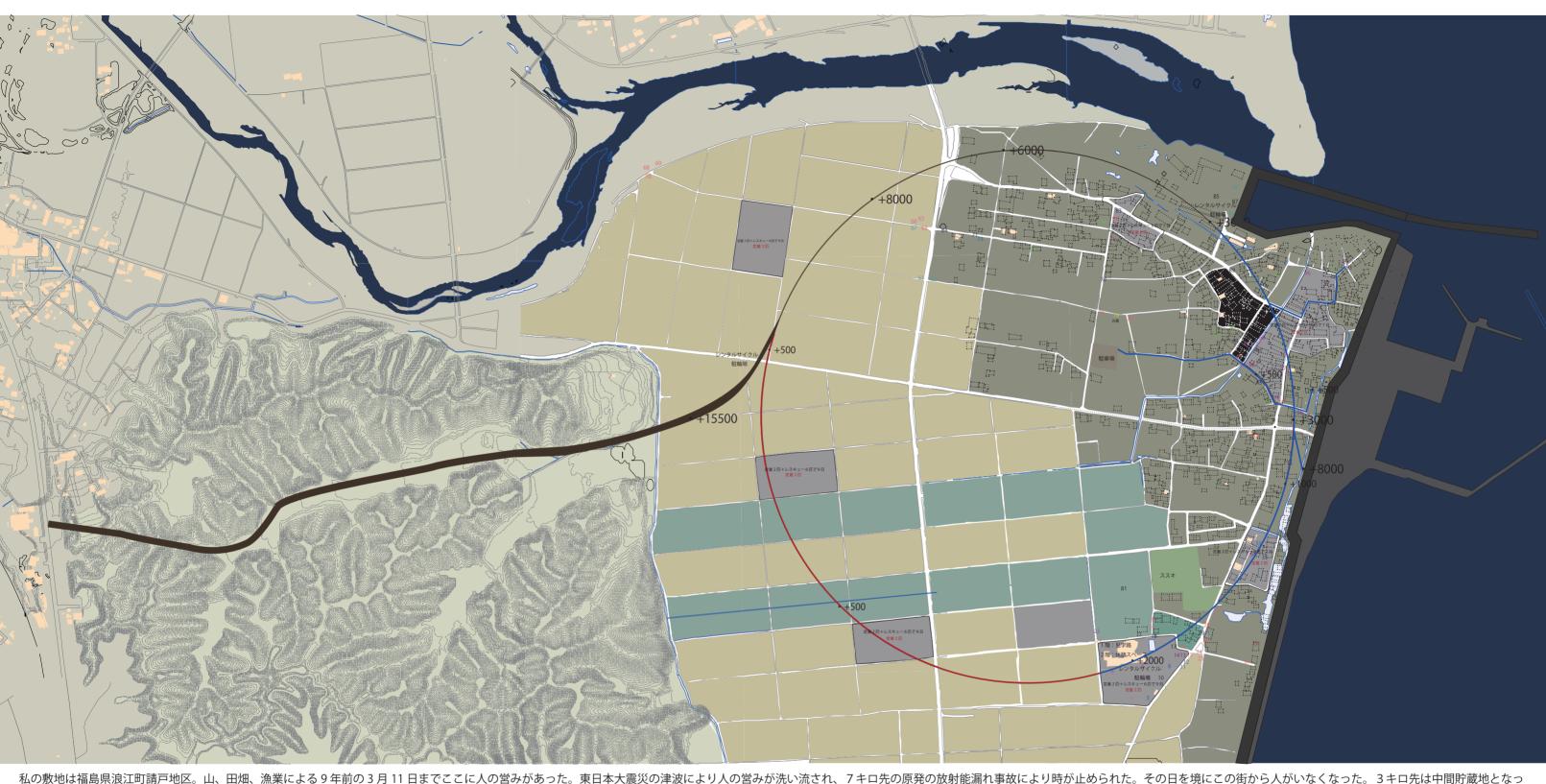
津波の被害により請戸地区は壊滅的被害を受けた。山際のところまで津波が押し寄せた。最高の津波高さは15.5m。このマップの白い部分は建造物や道路だ。震災以前に比べると建造物が大幅に減った。





ゲニウス・ロキの物質的姿を100箇所で採集した。それらの採集箇所を色ごとに分類した。





ている。それにより長期的にこの地に人が貫入することがなくなった。このような状況の中で自然と人のパランスが崩れ、この地は自然に還りつつある。私はこの地を訪れこの地の「ゲニウス=ロキ」を明示化するためにフィールドワークを行い研究を行なった。写真に写っている風景を目の前にした時、生まれて初めて正真正銘の自然の力を感じ前へ進めなくなった。私が生まれた平成の時代はもうすでに技術が進歩していた。普段歩くのは、固められたアスファルト。明日の天気を知るために星を眺めることもしないし、嵐の前触れのサインさえも感じ取ることができない。進化の途中で忘れてしまった能力が私には多くある。技術の進化の恩恵を受け自然という脅威から守られる生活のなかで、自然に対して恐怖を感じにくい人間社会となっていた。この動物としての感覚の低下から人は様々な環境問題を引き起こしているようにも感じている。3.11 以前は、原子力発電所を見たこともその恐怖も知らなかった人がほとんどだったのではないか。私もそうであった。人々の麻痺した感覚は時にまちを破壊する兵器になる。私はここに自然の力と人間の力がともに拮抗しあい風景が変化し続けるメキリアルパークを設計し人々の麻痺した感覚を問い直したいと思った。ここは長いスパンで自然と人の拮抗により世界が動いていく。設計範囲は研究にてフィールドワークを行なった部分だ。そこに意図的に人の力がある部分とない部分を作って自然の力と人の力が拮抗し合う風景を作り出している。人の象徴として、この地に営みがあった頃に使われ今は役目なく流れる用水路の水と、家畜としてのヤギを利用して人の自然への干渉を表現している。ヤギを図面上で赤色で示している区画に放っている。その部分だけ常に雑草は刈り取られ街の痕跡であった地面が見える。また人が生きるために作った用水路をある既存の区画にだけ引き込み植生を変えている。ヤギと用水路により継続する人の営みを表現しており時の経過の中で地面が変化していく。自然の中にある無数の柱はかつての住宅のグリッっとに沿って建てられた鏡面仕上げされた柱だ。鏡のように様々な風景が映り込みここに何か別の空気風景があったということを予感させる。100年後にこの地に人がいたことを示すものはこの柱と、用水路により植生が変化した地面とそしてヤギにより生活の痕跡が見える地面だけだ。これらの風景を一つの道の上を歩いて鑑賞する。津波で流されなかった山の向こう側にメモリアルパークの入口があり、歩くと山を抜けたところで津波の最大の高さである15、5、5メートルまで道が上がる。そしてメモリアルパークの風景を俯瞰的に眺める。徐々に道が下がり最後は地面のすぐ上を歩くような道となる。直接触れることはできない距離感である事で、この地を見る対象として意識させるようにした。4kmという長い距離はこの地を考えるのに必要な時間である。

時が経ってこの地の大部分は原生林へ戻る。自然の再生能力に甘んじて自然へ負荷を与えすぎている現代。自然と人とまち。どのようなバランスで共存するか。科学技術とどのように向き合うか。現代の人々の麻痺した感覚に問いかける場として100年後もその先も存在し続ける。

